

- [13] 寺田寅彦：天災と国防、岩波新書、1938.
- [14] 本多弘吉：地震学概説、岩波書店、1943.
- [15] 須田滝雄：岡田武松伝、岩波書店、1968.
- [16] 重要紙面でもみる朝日新聞90年、朝日新聞社、1969.
- [17] 大地震マガジニチュードF7.9-100万人が死ぬ日本大震災一、全国加除法令出版、1971.
- [18] 吉村 昭：関東大震災、文芸春秋、1973.
- [19] 藤井隆一郎・村上忠直：地震と都市防災、新日本新書、1973.
- [20] 中島陽一郎：関東大震災、雄山閣出版、1973.
- [21] 私は激震の中にいた 旧制第一高等学校学生被災体験記、有朋社、1973.
- [22] 美 徳相：関東大震災、中公新書、1975.
- [23] 木村耕三：改訂増補 大地震の前後 災害は忘れたころにやってくる、総合科学出版、1975.
- [24] 宇佐美隆夫：資料 日本被害地震誌、東京大学出版会、1975.
- [25] アサヒグラフに見る昭和前史1、朝日新聞社、1975.
- [26] 地震と都市防災、地震対策委員会・都市防災部会、(財)建築業協会、1975.
- [27] 寺田寅彦全集 第14巻、岩波書店、1976.
- [28] 寺田寅彦全集 第17巻、岩波書店、1976.
- [29] 小田貞夫：危険都市、有隣新書、1976.
- [30] O. M. プール (金井円訳)：古き横浜の壊滅、有隣新書、1976.
- [31] 今井清一也：日本の百年6 震災にゆらく、筑摩書房、1978.
- [32] 芥川龍之介全集 第6巻、岩波書店、1978.
- [33] 藤井隆一郎編：写真国説一地震、国書刊行会、1979.
- [34] 高橋 博也：地震防災一予知の現状と対策の具体例一、白雲書房、1979.
- [35] 航空写真地図 空から見た東京、日本交通公社出版事業局、1979.
- [36] 永井壯吉：新編平日乗1、岩波書店、1980.

- [37] 矢吹茂郎：文学者の見た関東大震災、建築防災、1980.7.
- [38] 矢吹茂郎：文学者の見た関東大震災 続、建築防災、1981.5.
- [39] 松本俊郎：関東大震災後の社会不安と経済問題、文部省科研費自然災害①「地震災害の社会・経済的影響に関する数量経済史的比較研究一関東大震災を例として」(研究代表者：倉林義正)、1981.
- [40] 柴川監泉：震災日誌、日本評論社、1981.
- [41] 大曲駒村：東京伝説記 関東大震災、中公文庫、1981.
- [42] シンポジウム 地震予知一科学と社会、日本アイ・ビー・エム報、1982.
- [43] 秋元律郎編：都市と災害、現代のエスプリ No.181,1982.
- [44] 萩原尊礼：地震学百年、東京大学出版会、1982.
- [45] ドキュメント 関東大震災、現代史の文庫、草風館、1983.
- [46] 野上弥生子：野上弥生子日記一震災前後一、岩波書店、1984.
- [47] 理科年表、丸善、1984.

なお、文末に掲げた写真は次の文献などから撮らせていただいた。記して御礼申し上げます。

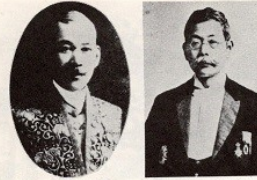
- | | |
|-----|-----------------------------|
| 写真一 | 文献 [44] |
| 写真二 | 文献 [14] |
| 写真三 | 文献 [9] |
| 写真四 | 文献 [20] |
| 写真五 | 復興記念館の御厚意による戦災記念館書庫、東京都慰霊協会 |
| 写真六 | 文献 [35] |
| 写真七 | 文献 [5] |
| 写真八 | 文献 [3] |

刊行物案内

『地震にそなえて 窓ガラスの地震対策』

本会の外壁耐震改修委員会(委員長 谷賀信早稲田大学教授)による編集。4色刷りで、写真・図の豊富な一覧向けの分りやすいリーフレットです。
内容は、危険性の高い窓、安全性の高い窓、改修方法、飛散防止フィルム・テープの利用等を盛り込んで

います。
総価は1部60円 送料実費(2部まで120円、6部まで170円)
ご希望の方は本会までお申し込みください。



写真一 今村明恒 (1870~1948) 写真二 大森勇吉 (1868~1923)

1905年、来たるべき東京大震災について今村論文 [1] が雑誌「太陽」に発表され、これに関する興味本位な報道や地震の発生、マツなどが重なり、東京市中には少なからず大震災に対する不安が存在していた。この様な状況の中で今村論文を学理上根拠なき浮説とする大森論文 [2] が発表され、今村・大森の地震論争として後々まで尾を引くこととなった。関東大震災は最初の今村論文から18年後、今村の危惧が殆ど的中した形で発生した。



写真四 中央気象台発表の地震直後の第1報

当初、震源は東京の北々東約17.8里(茨城県南部)と発表したが、直ちに東京より距離約30里(群馬方面)と訂正された。文中に「今後再び大地震ノ既見マ見ルコトハナカレバシ」の文字が見える。



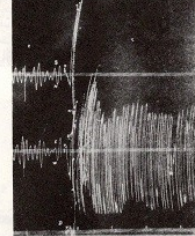
写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村

根府川山津波は白み川渓谷にそって6kmの行程を5分内外の短時間で通り抜け、全村170余戸の住家と住民・鉄道橋・駅舎・列車など莫大な被害が生じた。大地震の時から分離立ったやぶ立ないかと語り出し山津波が襲来したという生存者の証言がある。(7)



写真三 震災直後の中央気象台

台長岡田武松は就任1ヶ月にして大きな試練を受けることとなった。



写真五 帝大地震学教室における2倍地震計(今村式地震計)の観測記録

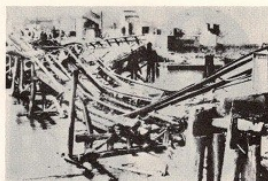


写真七 横浜市内における被害の状況

横浜における地震動の強さ・被害の程度は東京に比して著しく大きく、その上に東京と同様の広域大震災・大震災が起った。



写真九 馬入川における橋梁の被害(手前が鉄道橋)



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真七 横浜市内における被害の状況



写真九 馬入川における橋梁の被害(手前が鉄道橋)



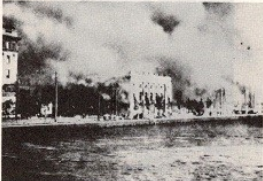
写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



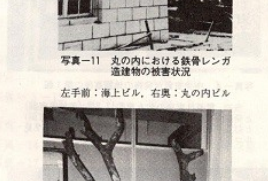
写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



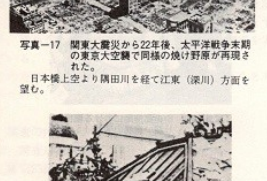
写真七 横浜市内における被害の状況



写真九 馬入川における橋梁の被害(手前が鉄道橋)



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真七 横浜市内における被害の状況



写真九 馬入川における橋梁の被害(手前が鉄道橋)



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真六 地震直後に山津波を受けた根府川村



写真七 横浜市内における被害の状況

写真一 本所施設崩壊における大震災後の惨状
2万坪の広場に4万の避難民が家財と共に充満した中で大地震火災が起ると、その大部分が一瞬のうちに焼死もしくは窒息死する未曾有の事態が生じた。

写真二 被服廠跡に閉鎖した安田邸に残された焼けトタン板
さまたかった大震災火災の象徴として横須賀町公園の復興記念館に保存されている。

写真三 日本橋付近の御儀家屋
「中ニ数十人居マズ、助ケテ下サイ」の立て札が目にとまる。

写真四 震災者の地方分散は好ましいことであったが、その反面では東京圏の巨大な事故多発などの弊害を伴った。このほか鉄道省・海軍省は船舶による震災者の大量輸送を長期にわたって実施した。



写真-21 二重橋前に立ち並ぶ避難小屋

宮城前広場をはじめ上野公園、日比谷公園など市内の主要な広場には避難小屋が林立した。その後、バラックの建設に伴い罹災者が過密化し、バラックの長期化とともに伝染病の発生、風紀の乱れなど様々な問題が生じた。



写真-22 上野公園西郷隆盛の銅像を覆った貼紙

居所を知らせ合う貼紙はこのほか宮城前の権公像や芝増上寺山門など地域の中心となる場所に多く集まった。



写真-23 給水車に集まる罹災者

飲料水の欠乏は甚しく、当初（地震の翌日まで）はわずかに車で配給を行った。芝・日比谷では湧水が、山の手では井戸水が利用できた。水道の通水は最も早い芝・麻布などで3日後、最も遅れた本所・深川では約3ヶ月であった。



写真-24 中央郵便局における郵便取り直し業務の開始（5-7日後）



写真-25 郵便局における貯金の払戻しに列をつくる罹災者

銀行の一般向け営業開始は9月10日（9日後）、14行一斉に行われた。



写真-26 米国における日本震災救済運動の光景

大震災の報道が米国に達すると、大勢は直ちに日本救済のために米国民の奮起を促し、米国赤十字社を中心として救済義援金の募集運動が米国全土で行われた。